
学校戦争！

ビフィズス菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校戦争！

【Zコード】

N1885Y

【作者名】

ビフィズス菌

【あらすじ】

この世界は力こそが全て。

力なきものは力あるものに従わないといけない世界。

そんな世界を生き抜く紅蓮と愉快？な仲間達は

戦争をしたり、恋愛したり、化け物の戦つたり・・・

とにかく壮絶な戦いを繰り広げていく。

少年紅蓮は一体どうなってしまうのか！？・・・

感想・評価等お待ちしています！！

NO・1「ようこそ光中へ！！」

この世界は、力こそすべて。

力なき者は大人だろうと子供にいじめられる。

力持つ者は小学生でも大人同等の扱いをされる。

そう、ここは力だけが全ての軍事学校なのだ！！

そして、年に一度この世界のたくさんの軍事学校が戦い頂点を決める「エキサイト・バトル能力決闘会」が始まるのだ！

これはその戦いを生き抜く1人の少年の物語である・・・

「やばい、遅刻！」

「ご飯食べてきなさい！」

「いいよめんぢくさい。いつてきますー」 そういう紅蓮くわんは学校へと走り出した。

紅蓮は今年、光楽第一中学校（光中）に入学する中学一年生である。光中は、能力決闘会に向けての能力開発に力をそいでいる中学校で倍率も高く、普通は100人に1人ぐらいしか入学できない名門だ。

しかし特殊な例があり、すでに能力の使える能力者＋スペーだと、一発で入学できる。

そして紅蓮は能力者なのだ。

キーンコーカーン

「ふう。ギリギリ間に合つた」と俺は言つてあいてる席についた。

と同時に、ゴリマッチョな先生が入ってきた。

「全員いるな？よーし今から体育館に集合！…これより能力測定を

行う。

能力測定でレベル別にクラスを編成するから真剣に行うように！」
あーいい忘れてた。私の名前は鬼瓦おにがわらうじむ 勉だ！宜しく！－」と言つと
ゴリマツチョは一瞬にして消えた。どうやら彼の能力のようだ。
それと同時にぞくぞくとみんなが教室をでていく。
「んじや行きますかー」と言い俺は体育館に走りだした。
この能力測定がものすごく大変だとも知らずに・・・

NO・い「めりそ光中へ!」（後書き）

なんかよくありますな話ですいません……
これからもがんばっていいくので感想・アドバイス等お願いします！

NO.2 「能力測定」

「ここが体育館か……」と俺は支給された学校の地図を見ながら言った。

その時、さつきのゴリマッチョな先生が
「みんな集まつたな！ では能力者ではないものはここに残り学力テストだ！」

このテストでクラスわけをするからしつかり取り組むように！ 能力者はグラウンドで「EVE」チェックをする！ 説明はあっちで行うからグラウンドにくるように！」

といい、また瞬間移動した。

「やれやれまた移動か……」と俺は思いながらグラウンドへ向かつた。

「みんなついたな！ これより「EVE」テストを行う。ルールは簡単。

ここにある重さ1tの鉄球ができるだけ遠くに投げればいい！ ちなみにこの鉄球は能力の威力を吸収して動力エネルギーに変える性質があるから能力を使って投げる遠くへ飛ばすことができるぞ！

つまり、強い能力が使える者はよく飛ばすことができると言つことだ！ それでははじめ！」

とゴリマッチョが言った。

「なるほど。能力をつかえばいいのだな。」と身長2m50cmくらいの巨大な男がいった。

「では投げるものから名前を言つて投げる！」

「俺の名前が後藤剛だ！ いくぞ！」と巨大な男がいい、

「こんなもの的能力をつかうまでもない！！」と叫びながら巨大な鉄球を持ち上げてほうり投げた。」

「記録は・・・・・23m!! なかなか記録だ!」とゴリマッチヨはいった。

それからたくさん的人が投げていった。だいたい記録は15~18mあたりで終わっていたが、

高校生くらいの青い髪のやつと俺と同じ年くらいの女の子と見た目がヤバそうなやつは全員26mくらいとばしていた。

「そろそろ俺の番だな・・・」と思いながら俺は投げる時をただただ待っていた。

そしてその時がきた。

俺は深く息を吸った。意識を右腕だけに集中させる。

すると、右腕を炎が包んだ。そう、俺の能力は炎をだすことだ。

そして勢いよく鉄球を殴った。すると炎は吸收され、鉄球が勢いよく飛んだ。

「記録は・・・・23m!! 能力の使い方がうまいな!」と褒められた。

しかし、後藤という人物はこれを能力なしでとばしたんだ。一体どんな体をしているのだろう。

俺はそう思ひながら全員が終わるのを待っていた。
そしてゴリマッチヨが「よし、テスト終了!」では次にこの記録を参考に勝負をしてもらう!!

トーナメント式だ! 勝ち残つていけば上位クラスにはいることができ、負けたらもちろん下位クラスにはいることになる! 上位クラスにはいりたかつたら勝ちのこれ!!」といった。

「今度はガチでいかないといけないのか・・・」俺は少々不安になつた。

なぜなら記録が近いものどうしが当たるとすると、俺はさつきの恐ろしいやつをあたることになるからだ。

一体俺は当たるのは誰になるのか? そして、あいつの能力がどんなものなのか?

とこう2つの疑問を気になつたまま俺たちは戦闘専用室へと向かつ

ていった。

NO.3「クラス分けトーナメント」

「これよりトーナメントのルールを発表する。先ほどのLEVELで全員のLEVELを設定した！

LEVEL 2, 15, 1520mはLEVEL 3, 1515mは
まず1510m飛はしたものにLEVEL 1, 10

そして同じヒエラルキーが戦つ!!

権があり、4回戦目から戦うことになる。

それでは「田×田」1の者は第一戦闘室へ、「田×田」2の者は第二戦闘室へ移動していく。第一戦闘室へ

「戦闘区へ」LEVEの者は第三戦闘区へ移動してくれる。そこで対戦相手を発表する。LEVE4は少しここで待つていてくれ。それでは移動！」

「おう お前能力使わないであんなは形はしたのか
昔から殿えていたからな。お前、名前は?」

「俺は紅蓮だ！お前は剛つて言つてたな。宜しく！」

さてと・・・次は同年代くらいの女の子か

「ん? 13だよ!」

「やつぱり俺と同じか！俺は紅蓮。お前は？」

גָּמְנִי, עֲמָדָה

俺は、他のやつにも話しかけようかと思ったが、他のやつは誰もよせつけないような雰囲気をだしていたので近づけなかつた。

しばらくたつたあと、一待たせたな！これから4回戦目が始まる！
それでは対戦相手を発表する！

「君の紙に書いといてあるから見とくよ」—10分後に第一戦闘

室に集まるよつてーーー」と先生が言つた。

「俺の相手は・・・・・剛だと！？」俺はかなり焦つた。

「どうやら俺らが対戦するようだな。悪いが本氣でいかせてもらひつ」と剛は言つてきた。

「もちろん俺もそのつもりだぜ」とカツ「良くいってみたが、俺はやっぱり不安でいっぱいだつた。

そして対戦の時がきた。

「二人とも戦闘準備は整いましたか？」と審判は言つ。

「それでは・・・・・戦闘開始！！」その合図と共に俺は両腕を炎で包んだ。

「先手はもうつた！」俺は剛の懷に飛び込み、腹を殴つた。

確実にみぞおちに入つた感触がした。しかし、剛には全く効いていなかつた。

「その程度か・・・・・」と言つと剛は俺の腕を掴み持ち上げ、俺を思い切り地面にたたきつけた。

「ぐはあー！」俺は背中を強打した。

しかしながら？あいつは俺の腕の握つたからやけどをしてるはず・・・

・
一体剛の能力はなになのだろうか・・・

NO.4 「炎 vs 水」

「もう一度！」俺は火力MAXで剛の腹を2発殴った。

やはり、剛には全く効いてないようだ。

俺はあることに気づいた。

剛の服には確かに焼けた後があつて服は少しやぶけているんだけど、体は無傷なのだ。つまり、服と体の間になにかがあるのだ。それがヤツの能力か・・・

「何度もおなじことをしても無駄だ！」俺は剛に殴られた。やはり、一撃は重い。

またまたもにへりつたら氣絶するだらつと思つた。しかし、やるしかない。

「畜生！」俺は服のやぶけた所を殴つた。

シユウウウウウウウウウウ

この音はなんだ・・・やつの体から煙ができる・・・いや・・・

コレは水蒸気だ・・・

「・・・水か！！」俺は確信した。

「ばれたか。よし、教えてやろう。俺の能力は水を操ることができ

る。

そして、この能力を使つてこんなこともできる！』と剛は叫つて、

じょじょに剛の手の平に水の球ができるしていく。

「ウォーター・ストリーム

「水流弾！！」やつは俺めがけてその水に球を飛ばしてきた。

「ぐはあ！」左肩を直撃した。どうやら折れてはいないが、強烈な

一撃だつた。

俺はよろめきながらも何かないか考えた。

「あいつがでくるなら・・・」と思い、

俺は意識を右手に集中させた。火の球ができるいく。

「これならいける！」俺は炎を圧縮させて球をつくつた。

「フレイム・キャノン

「炎砲弾！」その球はやつの腹に直撃した。

「ぐう！」初めて剛はよろけた。

「まだ威力が足りない・・・」俺はどりすればいいか考えた。

・・・そうだ！あいつの水を蒸発させて蒸気を利用すると強烈な一撃がうてる！

「もう許さん・・・じじめだ！」剛はさつきのに大きい球をつくりてきた。

「水流弾！」

「きた！」

俺は全身から最大火力の炎をだした。

俺の周りの火柱に水の球があたる。そして蒸発していく。

「炎砲弾！」^{フレイム・キャノン}俺はタイミングをみはからいその水の球の方へ飛ばした。

水の球と炎の球がぶつかる。そして、いいタイミングで水蒸気へと氣化した。すると、蒸氣の勢いで加速した炎の球が剛の腹へ刺さるよつにはいつた。

「ぐはあ！・・・」剛は倒れこんだ。

「勝者・・・紅蓮！」審判はそう言つた。

「やつた！・・・」俺はそのまま氣絶していた。

そして目が覚めると保健室にいた。

そこへ「ゴリマツチヨな先生と剛がきて、

「いい戦いだつた。お前はこのあと5回戦目もがんばるんだぞ」と先生が言つた。

・・・剛より強い奴と戦うのかと思つた。

まだ左肩は痛い。そう思つてると剛が、

「お前の攻撃、かなり響いたぞ。こんな」とはじめてだ。」と笑顔で言つた。

「俺、今から5回戦目行つてくるから見ててくれ」と俺は言つた。

「わかった。がんばれよ」と剛は言ってくれた。

「ああ、紅蓮！これもつていけ！」と先生が渡してきた。

「これは？」「そこに対戦相手が書いてあるー相手は強いぞー気をつけるよ！」

「ありがとうございます！」

そして俺は再び第一戦闘室へ向かつた。

「対戦相手は・・・グローリア・・・」

俺はその名前に何故か聞き覚えがあつた。

「まあ気のせいいか」と俺は思い、第一戦闘室に入った。

そこにいたのは・・・俺の親友だった。

そう、グローリアは俺の小学校1年生の時の親友だったのだ。

「・・・久しぶりだな、紅蓮」

「久しぶりだな、紅蓮」とグローリアは言った。

「なんでお前が・・・・・・」

俺とグローリアは小学校1年生の時には、もつ能力者であった。

グローリアと俺はよく喧嘩をしていた。

そして能力を使って決着をつけることにしたんだ。その判断が間違
いだつた・・・・

あいつの能力は氷を造ることだ。だから俺のほうが有利だった。

「どどめだ！」俺はグローリアに火を放つた。グローリアは氷の盾
をつくつた。

しかし、氷の盾は簡単に溶けてなくなつた。

その時に俺はもう一度火を放つた。すると、

「ぎゃあああ！目が！！！」とグローリアは泣きわめいた。

そしてグローリアは引っ越してしまつた。俺が謝ることもできない
まま・・・・

「それでは、戦闘準備はいいですか？・・・それでは、戦闘開始！」

「いやあー懐かしいなあー・・・紅蓮と戦うの」とグローリアは言
うと、

「アイス・ニードル氷針弾！」アイス・ニードルと言い氷の針を手につくり飛ばしてきた。

「ぐう・・・！」俺の太ももに刺さつた。すかさず炎で溶かす。

そして、「炎砲弾！」俺は反撃をした。

「そうやつ、こいつって僕の目をやつたんだよね。でも今の僕は違

う

グローリアはそう言って炎の弾に触れた。
すると、炎がどんどん凍つっていく。

「どうだい、じゃあそろそろどどめとここつか・・・」とグローリア
は言った。

「アイス・レイクイエム

「氷の鎮魂歌！」そういうと、俺の足からどんどん凍り付いていく。

「くそ！・・・くそ！！」俺は身動きが取れなくなつた。

「THE END」とグローリアはいつた時にはもう俺は完全に氷と化していた。

「・・・大丈夫か？・・・」俺は鬼瓦先生に起こされた。

どうやら保健室で2日凍つてたらしい。鬼瓦先生は、

「入学式は終わつてしまつたが、お前のクラスはもう決まつてあるから今すぐ行つて来い！

ちなみにクラスは1年C組だ。じゃあな！」と言つてでていつた。

「1年C組、1年C組は・・・ここか」

俺は教室に入つた。知つてる奴は剛と、姫だけだつた。

「もう体は大丈夫なのか？」「心配してたんだよー！」と2人は言つた。

「おう！ありがとう。もう大丈夫だ」と俺は言い返した。

「俺の席は・・・姫の隣か」俺が席に着いたあとに、知らない先生が入つてきた。

「えー、これから5時間目をはじめます。えー私は、能力社会科担当の後藤です。

それでは今日は魔術と能力の違いについて説明したいと思います。能力というのは世界の東半分の人々特有のもので、比較的科学的なものです。

しかし、西側では、東側から伝わつた能力を再現する途中で偶然できてしまつた『魔術』をつかっています。魔術は能力と似たようなものもありますが、原理は全て非科学的なものです。

えー次に能力と魔術のメリット、デメリットについて説明します。

能力のメリットは、体力消耗が少なくすみます。

しかし、魔術は膨大な魔力を必要とするため、より多くの体力を魔

力に変換しないといけません。

続いて魔術のメリットを説明します。

魔術は自然環境に問わず、いつでも使えます。しかし、能力は自然環境に影響されやすく、

場合によつては能力が使えない時もあります。

各種のメリット、デメリットはわかりましたか？

それでは最後に補足です。能力を持つものが魔術を覚えることはほぼ不可能です。

過去に実験されたことがあります、1000人中999人は能力と魔術が打ち消しあい、

無能力者となつてしましました。残りの1人は両方使えるようになりましたが、

その人間を能力者、魔術師のどちらにするかでもめあい、

魔能大戦争という戦争が起きました。そのため、これ以上の実験は禁止されています。

そろそろですね、ここはテストに出るので復習しておくよ！」

キーンゴーンカーンゴーン

先生の長い授業はやつと終わつた。

姫は、「やつと終わつたね！ねえ3人でどつか行かない？」と言つてきた。

「面白そうだな」俺は言つた。「たまにはいいな」と剛と言つた。

「んじやあ後で校門集合！」と言つてでていつた。

「それじゃあ俺たちも帰るか」と言い、俺たちも家へと向かつた。

NO -5 「氷の鎮魂歌」（後書き）

まだまだ理解不能な文章ですが、
なにか感想・アドバイス等あつたらお願いします！

「遅いーーー！」と姫は俺が校門にたどり着くと同時に言った。姫のとなりには誰かがいる。

「」の子は？」と訪ねると、姫は一矢口として

「いざれわかるよ・・・シフ」と言った。とつあえず俺は「俺の名前は紅蓮。よひじくな」と呟つと、

そして、後ろから雪がやってきた。

逃げようとしたが地面に倒れこんだ。

た。

紹介するわね！この子は中島玲ちゃん。

「剛の…・・・彼女よ！！」と姫は言った。
フレイム・キャノン

「剛・・・言い残す」とはない?」俺は放つ準備をしながら言った。

か
s
h
d
』

「……しがばつくれる気？」中島さんは見えない速さで蹴りをい

れた。どうやら彼女の能力は
スープで毒されてしまったらしい。

「んで、剛・・・付きましたの?付きましたないの?」俺は訪ね

た。

「付を合ひつて・・・・・る」

「この裏切り者！！！！！！炎砲弾！」剛が答えた瞬間俺は炎の弾を放つた。

「……………」

つた・・・

「やっぱカツプルで行くなら映画館よねー」と姫は頬を赤くして言った。

「なんでカツプルがリードをつけて歩かされてるんだ?」

「・・・・・これは運命の糸」「無理ありすぎるだろ!ー!ー」と剛はナイスツツ「コミ」をした。

その横で俺は、

「剛に負けた・・・剛に負けた・・・俺も彼女ほしいな・・・」と嘆いていた。

すると姫が、「そんなにほしいなら・・・ウチがなつてあげようか?・・・・」と言った。

俺はそれを知らずに「わーガン ムだ!ーかつ!ーいい!ー」と言つてると、

「聞けやゴルア!」と背負い投げをくらつた。

バキッ!ー!ー!ーあれれーおかしいなーひじがまがらないぞ??

と思いながら俺達は映画館へと向かつた。

「どの映画みる?」と姫が聞くと「・・・・・コレ」と中島さんが指さした。その映画とは

「・・・・・生きた豚を殺す祭り・・・だと!?」

俺と剛は恐怖を感じたが、女子一人はノリノリなので見ることにした。

映画が始まつた。

「ぐちよぐちよ・・・ブヒー!・!ブ、ブ、ブヒー!」

俺と剛は「ちよいトイレ行つて来る!」と言つて、その場から逃走した。

「・・・ひどい映画だつたな。お前も色々大変なんだな」と俺が言うと、

「あれは序の口だ。この前なんて、爆竹で目がふつとぶ映画を一緒

に見させられたんだぞ。それを思い出すだけで・・・ヴォエエエエ
エエ」と剛は吐いてしまった。相当壮絶なものだったのだろう。
「そろそろ戻らないとまたひどい目にあうな」「そうだな」と言い、
俺達は戻った。しかし、姫たちはいなくなつており、剛のケータイ
にメールが届いた。

「お前のどこのかわいい2人の連れは預かつた。取り返したかつたら見つけることだな!」というメールがきた。

「な、なんだと!?!?」剛はかなり焦っていた。やはり、いくらなんでも彼女は大事なんだろう。

「よし、探しにいくぞ!」「でもどうやって?」「いい方法がある・・・」

剛はニヤリと笑いながら言った。

NO-6 「恋愛とは裏切られるだけだよ畜生・・・・・」（後書き）

感想・アドバイスお待ちしています！

「いい方法がある……」と言つて、剛は一ヤリと笑つた。

「俺はいつも玲に遭遇しなによつて、あいつの髪飾りをGPRS機能搭載のものにしたんだ。

早速見てするか。」

「お前……変態だな」

「ちがう! 俺を変態なんかと一緒にするな!」

「俺は変態じゃねえ! 変態といつ名の紳士だよ!」

「結局変態じやないか!」と俺は剛にツッコまれた。

「居場所がわかつたぞ!」とは・・・学校付近だ! と剛は言つて走り出した。

「着いた・・・俺は息を切らしていった。

「体育館倉庫にいるようだ。早く急がないと・・・」と剛がいつた時に、

ドオオオン! といつもの凄い音がした。

「遅かつたか・・・早く行くぞ!」

「まさか、一人を・・!」

「違うな。あの音は玲がやつたもんだ。実はあいつ、俺以外の男に手を握られると・・・」

「その頃玲たちは・・・」

「なあなあ、このまま殺されたいか? ぐへへへへ」と変態Aが言った。

「よし、じゃあ逃げないよつて縛つといふか。ぐふふふふふ」と変態Bが言つた。

「ちよつとやめてよ!」「・・・お願い、やめて」と一人は言つた。

た。

「よしじやあーいつの元気な女は俺がやるぜ、ぐへへへへ」

「じゃあ無口なこの子を俺が・・・」と変態Bが玲の手を握った瞬間
ドオオオーンンーーという音とともに変態Bが吹き飛んだ。

「ああーーなこきやすくわーとんじやボケカス！死ねえー死ねえ
！クソ雑魚やるーーー！」

と、玲？は言つた。

「その頃俺達は・・・」

「ふう、着いた」俺達は体育館にいた。

「ここが倉庫か・・・」俺はドアを開けた。

そこにいたのは氣絶している変態Aと変態Bだった。

そこに中島さんが一人の髪を掴み、「おーお前ら土下座の一つでも
しゃがれクズ！ーーー！」

と怒鳴つていた。

「おこ、その辺にしどこでやれ」と剛が言つた、

中島さんは「・・・怖かった」といつものように言つた。どうやら
人格が戻つたようだ。

「それじゃあお前が心配してたのつて・・・」

「ああ。ここの連れ去つた奴らだよ。玲は心配するまでもないださ
やだあ」

剛が言い終わる前にはもう剛は地面に倒れこんでいた。

「それより大変だったのよ？もつ少し早くあてくれてもよかつたじ
やない」と姫は言つ。

「それより俺はお前」ときでも誘拐されることがあるのに驚いたよ
・・・

「死ねボケHーーー！」

俺は姫に倉庫にあったバットで殴られてそのまま氣絶した。

NO.7 「愛と変態と狂氣」（後書き）

アドバイス・感想等なんでもお待ちしております！！

私は佐藤 姫。今・・・好きな人がいるの!!

その人なんだけど・・・全く気づいてくれないし、私のことどう思ってるのかな?

今日はその人の誕生日! そんな私は街にその人の誕生日プレゼントを買いにきたの!

ここには色々な物が売ってるのよ!

「これなんてどうかな?」私はパークーを取つてみた。

「これをアイツとおそろい・・・フフフフフ」私は時々奇妙な子になっちゃうの!!

「よし! これにちやおう!」私は思い切つてTシャツを買つてみた。 「よし後はあいつにメールして・・・と」私は学校前に午後7時に来てとメールした。

「まだ時間はあるわね・・・」

私はちょっと街を回つてみることにした。

怪しい店があつた。私はちょっと入つてみることにした。

「ん? 能力ガム? なんか面白そうね!」私は買つてみることにした。

「なになに? このガムを噛んでる20分間は能力の威力を増大することができます。

ただし、その後の30分間は能力を使えなくなります。使う時は気をつけてつかつてください。」

私は食べてみることにした。

「とりあえずやさしい技にしどきましょうか・・・迅雷矢!」

私は雷の矢を大木に撃つた。

ズギヤン!! 矢は大木を簡単に貫通し、車を十数台吹つ飛ばした。

「やばい! 電光石火!」私は足に雷をまとい地面を勢いよく蹴り急いで逃げた。やはりガムを食べると早くなるわね。時速80kmと

いつたところかな・・・

「もう6時50分ね。行かないと。」私は学校へ行こうとするが、「おいおい姉ちゃん、かわいいねえ。今から俺らと遊ばない?」とチャラいやつらが30人くらいでよつてきた。

「いいわ、相手してあげる!」私は軽く奴らの体に電気を流そうとした。しかし、流れない。

「そうだ。ガムの副作用だ。30分は使えないのか・・・。

「ねえちゃん、能力」いつこはやめにしていいこりせ?」

「ちょっと、やめてよ!」

無理やり私はバイクに乗せられて廃墟となつた病院へ連れてこられた。

「さあさあ、俺達と楽しもうか!」リーダーっぽい奴は私の顔を殴つてきた。

「なにするのよ!」私は睨んだ。

「いいねえ・・・そういう顔!」私は集団で殴られたり蹴られたりした。

「そろそろとどめといくか・・・」男はスタンガンを取り出した。

「コレなんだかわかるか?ちょっと痛いけど我慢してな!」男は私の首にスタンガンを当てた。

普通なら中枢神経がイカれて、もう一度と体は動かなくなるだろう。

・

「そう、普通ならね!」

「おいしい電気・・・ありがとうね!」私はリーダーを殴つた。

「私は電気の能力者。あんたたちも少しは聞いたことあるでしょ?」

「まさか・・・! 東京都の中でもトップクラスの実力を誇る者だけに「えられる『守護神』の称号を持つ『電撃姫』だと!」

「さうよ! 今は好きな人と同じクラスになるため能力の威力を低下させてけどね!」

「「んなやつにかかるはずはない！」」

もつフ時30分だ。能力はつかえるでしょフー。「じゃあおひつきの仕返しといきましょうか！」

「雷双刃！」ライトニング・ツインソード 2本の雷の刃が奴ら全員を吹っ飛ばした。

「もう9時だ……絶対帰っちゃったよ……」私はあきらめていた。

歩いてる途中涙がこぼれおちる。息もまともに吸えない。しかし、学校前にたつてる男がいた。

「おう、遅かつたな！」

「え……なんていの？もつ2時間もオーバーしてんだよ？」

「なんでつて言われても……」ここにいろいろつていったじやん。

「……バカ」私は笑顔でそう言つた。

「お前なんでそんな服ボロボロなんだ？これ着るよ」とその人はさしだしてきた。

「いや、いいわよーそれより、君……今日誕生日でしょ？」

「そうだけど……」

「コレ、誕生日プレゼント」私は頬を赤くしながら差し出した。

「なんだ？ああ、パーカーか！ありがとうーでも一つもくれるのか・

・

「ああ！間違えて両方あげちゃった……最悪……」

「ちょっと……着てみてよ」私はテンションを落としながらも言つ。

「わかった。じゃあお前服ボロボロだし、2つもいらないからコレ着て帰れ！」とその人は言つた。

「ありが……とつ」

「よし！じゃあ帰るぞー」

「私たちは暗い道を一人つきりで帰つた。おそろいのパーカーを着て・

やつぱりこの人に決めてよかつたー…そう思つた一日だつた。

NO -8 「電撃姫の想い」（後書き）

今回はちょっと恋愛モノにしてみました。 へたくそですが、感想・アドバイス等あればお願いします。

とうとうこの日が近づいてきた・・・

そう、なんと1週間後に能力決闘会^{エキサイト・バトル}が開幕するのだ・・・

「えーこれから、能力決闘会の説明を始めるー！」

能力決闘会は、前衛・中衛・後衛・護衛を合計7人になるようにチームを組み、

チーム同士で戦い、最終的に敵の学校の核^{コア・プログラム}を破壊するか、全員を倒すかのどちらかを達成したチームが勝利するという大胆な戦争だ。

勝利チームには、能力理事会から施設の設備強化をするための援助金をだしてもらえるぞ。

では、早速1年C組で7人ずつチームを作るのだ！」と鬼瓦先生は言った。

「なるほど。じゃあ俺と姫と剛は決定だな。後は誰にしようか・・・

「俺はそう考えていると、

「黒澤君と、旭山さんと、下田君と、高森さんなんてどう？

私たちを前衛にして、補助系統の能力を使える黒澤君と旭山さんを中衛にして、

後衛に、特殊な能力を使える下田君を入れて、回復系統の高森さんをいれたらどうかしら？

バランスもかなりいいと思う」と姫は自慢げに言った。

「なるほど。旭山さんは結構かわいいしな

「ここにかわいい子がいるだろゴルア！」

俺は腕の関節技をきめられた。

「痛い痛い痛い痛い冗談です嘘ついてすいませんでした

「わかれよし！」

「おい、そんなことより、誘つてみないか？」剛は言った。

「わかった。姫は旭山さんと高森さんを誘つて、俺と剛で黒澤君と、下田君を誘おう。」

「そう俺は言い、2人を誘いに行つた。

意外と簡単に7人が揃つた。

「で、一体どうするの？」高森さんが言つた。

「よし、じゃあまず全員の能力を教え合おう。その能力で作戦を立てよう。」俺は言つた。

剛「まずは俺からだ。俺は水系統の能力を使える。そして、長所はパワーだな。」

姫「次は私。私は雷系統の能力が使えるの。スピードには自信があるわ！」

旭「私は、光系統の能力。相手を視界を奪うことが得意よ。」

黒「僕は、幻覚を見せるよ。だますことなら任せて！」

下「俺は、相手の情報を調べる能力だ。役に立つといいが。」

高「ウチは回復能力やで！回復はまかせてほしいわ！」

紅「最後に、俺は炎系統の能力だ。炎を使ってポップコーンがつくれるぜ！」

全員「そんなもんいらねえよ！」

紅「え・・・」

「さてと、作戦を立てましょか」俺は言つた。

「なら、最初に旭山さんが時間を稼いで、その間に下田君が情報を調べて、

それがあわせて私と紅蓮と剛で攻撃して、それでも倒せなかつた時は黒澤君の幻覚で、

傷ついた人がいたら高森さんの回復でカバーしていきましょう。」と姫は言つた。

「よしその作戦で決定だな！じゃあこれから一週間どうじよつか・

・俺は言つた。

「じゃあ今日から各自新技を用意するのはどう？」「旭山さんは言つた。

「おお、それはいいな」剛は言った。

「よし、じゃあ今日から各自トレーニングで！」俺はそう言った。

キーンコーンカーンコーン

「よしじゃあ俺も新技考えるか・・」俺は河川敷へ向かつた。

「じゃあ早速技を考えるか」俺は河川敷に降りて準備をした。

「**炎砲弾！**」俺は試しに撃つてみた。しかし、スピードが足りない。

「これなら確実にかわされるな・・・」俺は困った。そして・・・

ひらめいた！

「弾のサイズを小さくして尖らせると、空気抵抗も減らせる！」

早速俺は撃つてみた。

確かに、スピードが上がった。しかし、石すらも貫通せらる」とはできなかつた。

「ちくしょう・・・なら近距離技を先に考えるか」俺は気をとりなおして考えた。

「今までただのパンチだつたからな・・・パワーはそこまでないな」・・・そして俺はひらめいた！

「炎の噴射に回転をかけるとぶつかつた部分をえぐるよつて体に入つていく！」

「**炎旋削！**」俺は大きな石を立ててそこを殴つてみた。

簡単に石には貫通する。「これならいける！」俺は調子にのつて厚いコンクリートの壁にもやつた。

貫通までとはいかないが、8割は穴が開いた。

「さてと・・・次は長距離技を考えるか・・・」俺は考えた・・・

そして・・・

あきらめた！！

「畜生！やつてられるか！..」

俺は廃工場へと向かつた。

「誰かいないかな・・・おー剛だ！」

俺は声をかけよつとしたが、技の練習をしてた。

「**ウォータークレイジードラゴン**！」

「**水暴龍！！**」

剛の背中から巨大な龍が現れ、周りの鉄鋼を破壊する。しかし、持続時間はみじかめだつた。

「剛・・・あんな強い技を練習してたのか・・・」

次に俺は山へ向かつた。

そこには姫がいた。

「雷女神！」
エレクトリック・ヴァイーナス

姫から剣を持った巨大な女神が現れ、山を叩き割つた。しかし、姫は技を使い終わると倒れた。

「あいつもあんなに・・・俺はなにやってんだ！？」俺は自分に絶望した。

そして俺は再び河川敷に戻つた。

「スピードをあげなくとも確実に当てる方法・・・考え方！」

「考え方！」俺は自分に言い聞かせた。
そして・・・ひらめいた！

「炎に酸素をたくさん含ませて、炎の色を消せばいい！」俺は深く呼吸をし、手に炎を弾をつくる。

「もつと酸素を！」炎は青くなつた。

「足りない！もつと！もつと！もつと！もつと！」俺は呼吸を早めた。

しだいに意識は薄れていいく。しかし、みんなはもつとがんばつているんだ。

「俺だつてできるんだ！！！」炎は完全に消えた。

いや、炎は見えなくなつたのだ！

「いける！影炎弾！」
シャドウフレイム・キヤノン俺は遠くの建物めがけて撃つた。全く見え

ない・・・

しかし、ドオオオンという衝撃と共に建物は吹つ飛んだ。

そう、新技は完成したのだ！

「やばい！逃げなきや！」俺は喜びながら逃げた。

それから一週間、みんなは技を磨き上げた。そして、能力決

闘会がやつてゐた。

「みんなよく聞けーーー！今日は能力決闘会当日だ！気合をいれていけよ！」鬼瓦先生は言った。

「まずは一回戦だ。今回の対戦相手は紅葉中だ！紅葉中の奴らは毎年長距離型攻撃を得意としてくる！

接近戦に持ち込んで敵チームを倒せ！

ここ一年C組は核破壊を優先順位として、敵はF組などの下級クラスにまかせるのだ！

それでは紅葉中へ突撃！！」と先生が叫ぶと、一斉にクラスからみんながあふれでていく。

「よし、俺らもいくぞー！」俺らのチームは紅葉中の校門ではないとこりから奇襲をかけることにした。

「着いたな・・・全員位置についたか？」俺は無線で聞いた。え？ 無線はどうして持つてるって？

そう、この無線はお金持ちの黒澤が人數分買つてくれたのだ！ありがとう黒澤！

「じゃあ俺が理科室のガラスに穴を開ける！そこでお前らが侵入しろー！」俺は言った。

「まずはちょっと氣をそらす必要があるな・・・」俺はそう言い手を構えた。

「フレイム・キヤノン
炎砲弾！」弾は3階のガラスを割る。

パリイイイン！という音とともに、「おい、みんなこいつこいつ！敵がきたぞ！」という声がした。

「馬鹿だな・・・そっちには誰もいねーってー」俺はガラスに指を当てた。

「フレイム・レーザー
炎光線！」指から熱線ができる。

ガラスは割れることもなくキレイに丸の形にくりぬかれた。

「よし、いまだ！みんな入れ！」俺は先に理科室に入りみんなに指示すると、

「なんか理科準備室の窓開いていたから入ってきたわよ」と姫が言った。

「……え」俺はかなりの精神的ダメージを受けた。

「さてと、核を探すか」剛はそう言った。

「じゃあ下田君、核の場所調べられる？」旭山さんが言つと、

「ちょっと待つてろ、今やつてる」と冷静に答えた。

「核は……屋上にある。屋上はけつこう守備を固めているな……」

「下田は言つた。

「なら屋上への突破口をつくるのは私に任せとー」と旭山さんは言った。どうやら新技を使うらしい。

俺らは屋上へと向かつた。しかし、そんなに都合よく通してはくれない。

「こ」の学園のAクラスだ。「こ」でお前らを消す！」と3人のやつらが言つてきた。

「よし、ここは俺に任せんんだ！」剛は言つた。

「お前一人でこのAクラス全員はムリだ！俺も残る！」俺は言つた。

「それじゃあ戦力がなくなっちゃうだろ！」剛は怒鳴つた。

「ならここは僕が残ります。」黒澤が言つた。

「ウチも！」一人の回復は任せて！」高森さんは言つた。

「……チツ！わかったよ！絶対追いつけよー」と俺は言つて上へと向かつた。

「やつと戦える時がきたな。」剛はニヤリと笑いそう言つた。

「Aクラス3人相手に雑魚が2人はちょっとかわいそうだよな。ハ

ハハハ」Aクラスの奴らは笑つた。

「水流弾！」剛の撃つた水の弾は、Aクラスの1人を吹き飛ばした。

「ウォーターストリーム

「・・・これで平等だろ？」剛はニヤリと笑いながら言った。

「ふざけてんじゃねえ！」他の2人が襲い掛かつてきた。

「おつと、君の相手は僕です！隔離空間！」そう黒澤が言ったと

同時に、

黒澤とAクラスの1人が黒い渦の中に吸い込まれていった。

「じゃあ名前を聞こうか」剛は言った。

「俺の名前は長谷川だ！」Aクラスの1人はそう言った。

「んじゃ早速はじめようか・・・」

「望むところだ！お前は最も苦手なタイプと当たつたことに後悔するんだな！」と長谷川は言つと、

「雷白虎！」^{エレクトリック・ホワイトタイガ}と言い、雷の虎を召喚させた。

「くふふふふ、相性最悪か・・・そついえば紅蓮も相性最悪で俺に勝つたのか・・・」

「いいぜ！これくらいハンデだ！水暴龍！」^{ウォーター・クレイジードラゴン}

剛も龍を召喚させた。

「高森、お前はもうあいつらを追え！」こは俺一人で十分だ！

「でも・・・」

「あ、忘れてた、お前には重要な任務がある。

お前はこれを持つて旭山と合流して別ルートから奇襲をしろ！」

「・・・わかつたで！絶対負けたらあかんぞ！」と高森は言って紅蓮たちのほうへ走つていった。

「さてと・・・はじめると

水と雷、龍と虎、剛と長谷川

一体勝者はどっちになるのか！？

NO.12「水暴龍の涙」

「粉々にしてしまえ！」体に雷をまとった虎が走ってきた。

「いけ！水暴龍！」龍は唸り声を上げながら突進してきた虎めがけて水をはいた。

「そんなものきかない！雷咆哮！」サンダー・プラス虎は咆哮をした。

「ぐう！これでは鼓膜が・・いけ！水尾鎌！」ウォーターテールシックル

龍の尻尾が鎌のようになり、鋭く虎の前足に突き刺さった。

「グオオオオ！」虎がわめくと同時に、放電した。その電気が尻尾を通じて龍に流れる。

「ギュウウウウン！」ハクトリック・ラッシュ龍はひるんだ。その時に、

「まだ！雷連撃！」クレイジー・エンド虎の猛攻に龍は手もだせない。

「耐えろ！水暴龍！」剛は言った。なにかいい策はないか・・・

剛は考えた・・・しかし、勝ち田のある技のこの水暴龍しかない・・・

・

「ギュウウウウン！」龍はもう瀕死の状態だ・・・「未完成だが・・・最後にやるしかない！」

剛はそう言つと、「いくぞ！水暴龍の涙！」と言つた。

龍は一粒の涙を流し、塵となつた。

「ふふふ、ざまあねーな！やつちまえ雷白虎！」虎は剛に向かつて走ってきた。

剛が深く呼吸をすると、手にさつきの涙が集められていく。
そして、水の弾ができた。

「これで終わりだ！！水暴龍の矢！」ウォータークレイジー・アロー

その水の弾の形が変化していき一本の矢になつた。そして、剛は矢を放つた。

その矢は一瞬にして虎の腹を貫通し、そのまま長谷川へと突き刺さつていった。

「こんなところで・・・電磁分解！！！」プラスマ・ディストロ

矢は長谷川の技により、分解されていく。

「それはどうかな」剛はにやりと笑つた。そして、再び手を構えた。すると、さきほど分解され、水分子へと戻つたはずの涙が、再び手に集まり矢を形成した。

「バカな！」長谷川はあせった。

しないんだよ。」
ウォーターカレイジー・アロー

「俺が二んな雑魚」・・・・・雑魚

矢は長谷川に直撃した。

「紅蓮……すまない……そつちにはいけそうにない……」剛は倒れた。

その頃黒澤は

「それじゃあ、おまえが「黒魔五番」いた。

「拙者は永山だ。武芸なら無双！」永山は腰につけてた刀を抜いた。

「拙者は炎の能力を持つ者。この名刀『真紅

で耐えられるなり。

した。

地面が溶けていく・・・

「なに!? こんなに強力な火力だとは……」黒澤は少し驚いた。
「拙者の最大火力は・・・・・ 400万
!!」

地面が溶けていた、黒澤は沈んでいく。しかし、「ヤリと笑いながら「残念ながらこの部屋の主は僕ですよ。こんなもの!」一瞬で地面は元通りに戻った。

「なに!?しかし、これはどうでござるか!炎ノ十字架!」

永山が地面を斬ると、地面に十字架の割れ目ができ、そこから火柱が立つ。

「ぐはあ!」黒澤は炎に包まれた。

どうやらもう一人の僕の出番ですね

「やーーーーーお前のランドセルゲットーーー返してほしかつたらこいつまでこいよバカーーー!」

「返してよーー!」

黒澤は小学校の時に、とても平凡な子でみんなにいじめられていたのだ。

しかし、あることをきっかけにいじめは無くなる。

黒澤は図書館へ行つた。

「やつぱり、ここはあんな奴らがいなくて落ち着けるよ・・・」すると、そこに自分の同じくらいの小学生が入ってきた。黒澤は思い切つて話かけてみた。

「君、名前なんていうの?」

「僕は霧島 遼」その少年は言った。それから色々話をしていくうちに2人は毎日遊ぶよう今まで仲良くなつた。ある時、そのことがいじめつ子達にばれた。

「お前、友達できたんだってな!」

「どうせお前の友達なんていじめられっこなんだよな!ハハハハ」いじめつ子達は言った。

「違う!遼はそんなんじゃない!」

「じゃあ俺達が確かめてやるよ!」いじめっ子達は言った。その時、「どうかしたの?」と遼が現れた。

「遼! 来ちゃダメだ!..」と黒澤は言つた。しかし、遅かった。

「お前が霧島つて言つのか・・・俺と勝負だ!」いじめっ子は遼を吹き飛ばした。

遼は道路へ吹き飛ばされた。その時、トラックが遼の所をとおり、遼はトラックに轢かれた。

「遼! しつかりして!」黒澤は涙を流しながら叫びながら近づいた。

「黒澤・・・お願いがあるんだけど・・・」

「何? なんでも聞くよ!」

「俺の右目は特殊な目で、きっとお前が持つてたほうが役に立つだろ! ・・・

だから・・・俺の右目を取つて、お前に持つてもらいたい・・・」「そんなことができないよ!」

「いいから早くしてくれ!」遼は怒鳴つた。

「・・・わかった。」黒澤は泣きながら遼の目を取つた。そして遼は死んでしまつた。

「死んじやつた・・・でもお前が右目を取つたからお前の罪だよな!」

悪人は・・・死刑だ!」いじめっ子は殴りかかってきた。

「遼は俺と共に生きる!」

黒澤は自分の右目を潰し、代わりに遼の目を入れた。

その時、黒澤から紫の霧がでて、気づいた時には全員吹き飛んでいた。

「・・・これがお前の目の力なんだな・・・」

「私も本気を出しましょつか! 幻想ノ世界! イマジン・ワールド」

黒澤の右目が紫の光を放つ。同時に火柱は消滅した!

「Iの世界を発動した瞬間に僕の絶対的勝利が確定しますよ。なぜなら……」

黒澤は手を上に突き出し、指をパチンとならすと、永山の体に切れ目ができ、血が大量にでた。

「私は触れなくても攻撃ができます。Iの空間には田には見えないほどの霧ができており、

この霧が一瞬にして移動することであなたの体に攻撃を引えられるのです。」

「ぐ……無念……」永山は倒れた。

「ふう……・・・・・久々に能力を使いましたね。さてと、疲れましたけど……追いかけますか」

黒澤は走りだした。

「その頃紅蓮たちは」

「どうやらこの上に核あるようだな……」

「とつとと破壊しちゃいましょ！」姫が言った。その時、

「ちょっと待つた！」と、2人の声が聞こえた。

「誰だ！」俺は聞いた。

「俺達は、この学校の最強コンビ！悪いがここでお前らを倒させてもらひつ！」

「どーする？」俺は姫に聞いた。

「そんなもん言つまでもないわ……」姫と俺はニヤリと笑いながら言った。

「倒す！！」俺と姫は声を合わせて言った。

「はたしてお前らはどこまで俺達に通用するかな？・・・・クフフフ」

「旭山さん！」その時、高森はやつてきた。

「早くきて！私たちにはもつと重大な任務があるのー！」

「旭山！行つて来い！」俺はそう言った。

「・・・・わかったわ！ここは任せせるから私たちにこつちは任せでー！」

「言い、二人は走つていつた。

「じゃあはじめましょうか」俺は一ヤつと笑しながら右手を構えた。

NO -13- 幻想ノ世界 - (後書き)

久しぶりの更新です。
感想・アドバイス・評価などお待ちしているので
じやんじやんしてください！

「これでもくらえ！影炎弾！」俺は見えない炎を一人に飛ばした。
 「ぐはあ！一体どこから……？」一人は全く気づいてないようだ。

「こんなに強い技とは思つてなかつたぜ……」俺は自分の能力に驚いた。

「次は私の番よ！雷双刃！」二つの雷の刃が一人を切り裂く。

「ぐ・・・こんなに強いやつとは思つてなかつたぜ……なら本氣でいかないとな」二人はニヤリと笑いながらそう言つた。

「じゃあ一応自己紹介としこうか。俺は浅倉！まあ聞いたとしてもお前らにはここで死んでもらうんだけどな！くらえ！爆音砲！」

浅倉は大きく口を開けた。

すると、口からなにかがわからないが、もの凄い衝撃が体に当たつた。

「ぐはあ！」俺は吹き飛んだ。

「あいつの能力は音よ！見えないから気をつけて！」

「お前も自分の心配したらどうだ？？」もう一人は姫の後ろに立つていた。

「危ない！」俺は叫んだ。

「遅い！真空斬！」そう言つたが何も起こらなかつた。

しかし、姫は「痛つ！？」と言つて肩を抑えた。そして姫は苦痛に顔を歪めながら、

「こいつの能力は……真空状態をつくりだすことよ……」と言つた。

「あーあー名前を言つて忘れてたな。俺の名前は深山だ。……つてもう聞こえてないかなあ？」

アハハハハハ二人は笑つた。

「ふざけるなよ……お前ら2対1で女の子に手をだすなんて……

絶対に許さない！」俺は叫んだ。

「ああ～ん？ 女だろうと子供だろうと俺の邪魔なものは全て殺す！ それだけだ！」浅倉は言った。

「・・・・お前の根性叩きなおしてやる！」俺はそう言って右手を構えた。

「おつと、そうはさせないぜ！ 破壊騒音^{ブレイク・ノイズ}！」浅倉が言つと、

俺の右腕が動かなくなつた。「なんだ！？」

「今のはなあ～この音を聞かせるだけで脳に刺激を与え、一時的に能力を使えなくし、体のどこかの部分を動かせなくするんだよ～！」

と浅倉は笑いながら言った。

「じゃあ俺らの必殺技いきますかあ～」深山は言った。そして、二人で拳を俺のほうへ向けて、

「^{バキコームノイス・マシンガン} 真空騒音連射銃^{シンクロハーネス}！」

音速になつた小さい真空波がマシンガンのよう[♪]に飛んできて俺に突き刺さる。

「ぎやあああああ～」肩と太ももを真空波は貫通した。

「紅蓮！」姫は叫んだ。

「畜生・・・なんで俺が・・俺が・・」んなとこで負けなきやなんねえんだよ！～！」

その叫びと同時に俺の体と姫の体が光りだした。

「これは！？」俺は驚きながら呟くと、

「これは・・・魂の共鳴^{シンクロハーネス}！？これは能力者同士が魂を一つにした時に発生する今だ不明な現象よ～この現象が発生してる時に能力の威力は「一人の力の合計」になる。

つまり強力な技が使えるのよ～」姫は喜びながら言った。

「じゃあ俺なも仕返しをしてやるか・・・俺は姫の手を握り、呼吸を合わせ始めた。

「もつとシンクロ率^{ヘルフレーム・レールガン}を・・・どんどん光は大きくなつていいく。

「今だ！獄炎電磁砲！」俺達の腕から巨大な弾が形成された。

その弾は中心の炎を覆うように電気がとりまき、周りの金属を含む

ものが集まつていいく。

そして、中の炎で溶かされ、炎、雷、鉄の塊へと変わつていった。
「そんなバカな！？俺達を超えるコラボなんて！？・・・」深山は
かなり焦つていた。

「これでもくらえ！」その弾は勢いよく飛んでいって一人に当たつ
て、そのまま学校の壁を貫通していった。

「ぎゃあああああああ！」一人は山まで吹き飛んでいった。

「やつと終わったのね・・・」姫はそう言つて氣絶した。

「いや、まだだ・・・核を破壊しないと・・・」俺は氣絶しそう
だつたがなんとか耐えた。

その時、「お待たせしました。」と血の声と共に黒澤がやってきた。

「よしじゃあ行くか」俺は姫を背負いながら扉を開けた。

「屋上までの階段はなかなかに長い。

「くそつ、この階段を姫という重い物体を持ってあがるのはきびしいなああああああ！」

「……どうやら左肩が完全に脱臼しているようだ。（姫のせい）で「そろそろ屋上ですね。急ぎましょ。」黒澤は言った。

「フフフ、甘いぜ姫！俺はお前に脱臼を200回近くやれでいいの自分で直せるのだ！！！」

俺はどや顔をしながら脱臼を直した。

「到着！」俺は姫を地面に降ろした後に前を見ると、そこには大きな核があった。

「これが核か……とつとと破壊しちゃおひげ」俺は右手を構えながら言った。

「ちょっと待つて……これは罠だ！！」黒澤は言った。

「バレたか……でももう遅いぜ！」と言ひ声と共に周りを見たときにはもう周囲を40人くらいに囲まれていた。

「残念ながら俺達の学校は守備を固めていたのさ……これでおしまいだな！」と一人が言った。

「どーします？」黒澤は言った。

「どーするつて全員倒すしかないだろ！」俺は右手を構えた。

「そーですよね……」黒澤の右目が紫に光りだす。

その時無線で、「田をつぶつて！」という声と共に強烈な光が見えた。

一瞬で俺達は田をつぶつたが、不意をつかれた敵は全員地面に倒れこんだ。

「これが私の力よ！」旭山が後ろから現れた。

「紅蓮！これ使って！」高森は筒を渡してきた。

「何々？『放射筒』？これを体にはめて能力を使つと、これで能力を増大して放つことができます。

なお、遠距離能力にしか使用できません。なるほど・・・」俺は右手にはめてみた。

「炎砲弾！」炎の弾は核へと勢いよく飛び出した。

そして、核にあたると同時に、激しい火花を散らした。

「いけええええええええええ！」俺の叫びと共に、核を弾が貫き粉々に吹き飛ばした。

「やつたあ！！」俺らは叫んだ。そう、俺らの勝利が確定したのだ

！！

それから3日後・・・

「今回は1年C組の紅蓮達のチームにより、勝利することができた

！！

みんなもよく頑張った！次の2回戦は1ヶ月後に開催されるからそれまでにみんなもしっかりと訓練するよつてー」と鬼瓦先生は二口二口しながら言った。

「俺達本当にやつたんだな・・・」俺は今だに自分達の力が信じられない。

「私達すごいのね！」姫はめちゃめちゃ嬉しそうに言つた。

「剛のケガもウチが治してやつたんやで！」高森さんは自信満々で言った。

そう、高森さんは旭山さんと合流して奇襲の準備をしている時に、やつぱり剛が心配で様子を見に行つたら、ぐつたり倒れていたので手当てをしていたのだ。

「おかげですっかりこのとおりだ」剛はガツツポーズをした。

「次も頑張ろうぜー

「おーーーー！」

「その頃校長室では・・・」

校長「ほつ、今回はこいつらが・・・」

鬼瓦「はい。こいつらはC組だけどB組並の戦闘能力を持つています。」

校長「こいつは面白くなってきたな・・・こいつらならアレも・・・」

鬼瓦「校長！その件はあまり言わない約束でしょう・・・」

校長「ああ、悪かったな・・・これは楽しみなやつらだな・・・」

NO.15 「眼」（後書き）

もうすぐ400アクセスです！！
みなさんありがとうございます！
これからも頑張っていきアドバイス・感想・評価等を是非お願
いします！

NO.16 「ボウリング大会ーー！」

俺達のグループは今回の戦争の報酬で手に入れた金で、今打ち上げパーティをするところなのだ。

「よつしゃーー！2万もあるけどどこ行くー？」高森は片手に持つている諭吉を2つ見せながら嬉しそうに言つた。

「んーとまあ、ボウリングでも行くかー！」

「賛成ーー！」

そして、俺達はボウリングに行くことにした。

「じゃあ一番ビリだつたやつが負けた人が一番の人の言つ事なんでも聞くつて言つのはどうづー？」

姫は言つた。

「それは面白そうですね。」黒澤はずつと読んでいた本を閉じて言つた。

みんなはどんどん投げていき、俺の番になつた。

「じゃあまずは俺からだなー！おりやあああー！」俺はボールを投げた。
・・・・・ペーン。「あくしょおおおおおおおおー！」俺は本気で投げた。

・・・・・ペーン。「もうやだーー！」俺は自分の弱さをはじめて知つた。

「私の番ねー！」姫はボールを構え言つた。

「お前・・・・・6ポンドってwwwwww」俺は爆笑した。

「うるさいわねーー！」姫はボールを投げた。

ボールはキレイなカーブをしながら、見事に全てのピンを倒した。

「なにー？俺はこんな6ポンドー」ときに負けたのかーー！」

「うるさいわねーまああなたのビリは確定ねー！」姫は嬉しそうに言つた。

それから俺達はどんどん投げていく。そして最後の10レーンになつた。

今のスコアは

剛227 黒澤81 旭山45 高森182 倭22 姫231

・・・・ やなうなら ホウリング も「絶対」なしからな！！！
とうとう俺の番が来た。

「俺が集中した時の恐ろしさを教えてやる！」

旭山さんは48で終わつたからまだ勝てる確率はある。

「いくぜえええええ！」俺の投げたボールはフピン倒した。

○ 作に活用するに一 手

「この1球に俺の全てをかける!」俺は神が与えてくれた最後のチ

「ハナちゃん、おまえは無駄にしないで、おまえは決意した

卷之三

モード別出典

「え？」その時俺は田の前が真っ暗になつた。

卷之三

目が覚めた頃には剛の背中に乗せられてた。

「あう、起きたか。もちろんお前がビリだつたぞ。そして一位は姫

「…………トーナメントが開催されるが、どうぞお出で下さい。」

「…だから行かねえだよ…」

「バキバキ！！」という音と共に俺の腰は碎けた。

「じゃあ明日ね~」姫達はそう言つて。

「じゃあ俺達も帰るぞ」

「そうだな。やれやれ・・・明日がつらいな」俺はそう言いながら剛を家へと歩いていった。

明日、悪夢を見ることになるとほんの少しだけ・・・

7月27日。晴天。とても気持ちのいい朝だ。

そう、この後に地獄デートが待つていないとしたら・・・

俺は姫の家へと向かつた。

「はあ・・・・こんな口は家でのんびりしたいのこ・・・・」俺が嘆きながら歩いていると、

「遅いわよー！」と姫は言つてひちへ向かつてきた。

それはいつも姫とは違い、とても女の子らしい格好でてきた。

「うおおおー！」レは萌えるぜ！－！」と俺は小声で言つとも、冷

静に装いながら

「んで、どこ行く？」と聞いた。すると姫は、

「じゃあねー・・・遊園地ー！もちろんあんたのおいづでねー！」と笑いながら言つた。

さよなら・・・俺の諭吉・・・来月までお別れだな・・・

そんなこんなで俺達は遊園地へと向かつた。

「いーか・・・」俺はそう言いながら入場券を2つ注文した。

「合計21300円になりますー」

なにー？諭吉を一枚も召喚しないといけないだとー・・・貴様ー！ぼつたくりかー！

俺は後ろを見ると、姫がもの凄い威圧感でこちらを見てくる。

「・・・」俺はなにも言わずに諭吉と小銭を召喚した。

そして俺達は遊園地へと入場した。

「最初はどれに乗る？」

「うーん・・・・」「一ヒーカップかな？」姫は地図を見ながらそ

言った。

「じゃあ行くか」と言いながら「一ヒーカップに乗り込むと、

剛と中島さんが降りてきた。

「剛、お前もきてたのか」

「ああ、正式には連れてこさせただけだ。おかげで諭吉が二人も死亡した……」

「やっぱりお前もだつたんだな……」俺と剛は涙を流しながら言った。

「……剛、楽しかった」

「玲、お前のせいだ俺はこんなに吐き飛ばし……」剛の顔は青ざめていた。

そう、中島さんは能力でとてつもなく早くホールーカップをまわしたらしい。

「じゃあ一人とも頑張ってね！」姫はそう言い残して、俺と一緒にホールーカップへと言つた。

「あー楽しかった！」

「楽しかったな！次はどこ行く？」

「うーん……お化け屋敷！！」

しまつた！俺は…………お化けが大嫌いなんだああああああああああー！」

「わ、わ、わ、わかった」俺は心の叫びを閉じ込めて言つた。

そして、お化け屋敷へと向かつた。

井戸から女人の人がでてくる。

「きやあ！」姫は俺にだきつこうとしてきたが、

俺はそんなことをされることもなく猛ダッシュで駆け抜けた。そして出口へとた。

「もう……」姫はムスッとしてたが、クレープをおじると機嫌を取り直した。単純な奴だ。

「さてと……もつ時間だし最後にどこに行く？」

「やっぱ観覧車かな？」

「よし行くぞ～」俺達は観覧車へと向かつた。

「ねえ……私のことどう思つてる?」姫は上目遣いで聞いてきた。

「くそ……俺のときめき度が……！」

「うん……嫌いじゃない」

「なら……好き?」

「ううん……微妙」その瞬間俺の首の骨が折れた。

「もう一回言つて?」

「うそですうそですうそです大好きですから許してください」

「なら私と……と姫が言いかけた瞬間に、観覧車が止まった。

「一体何が!?」

その時園内放送がかかった。

「えーこの遊園地は私たちがハイジャックさせていただきました

あと5分後に観覧車を爆破するので要注意を!」

「え? ! ! ! ? ? ? ?」

「おい！どう言つてんだ！5分後に爆発つて……」俺はとてもな
く焦つていた。

さすがに、イタスラにしては派手すぎる……しかし、えなく俺達は吹き飛ぶだろう。

「どうすんのよ！」姫は涙目はなりながら言った。
「そつだな・・・・・」俺は冷静に考えた。

なにか方法はないか……ここは観覧車なので、べんて……周りにもたくさんの人人が閉じ込められている。あいにく周りは木などしかなく、飛び降りて助かるとは思えない。

俺は公共施設の設備のきまりを思い出した。そして 待てよ? なにか見落としてないか? ついでに、鬼畜の「アーヴィング」を同時に見つけた。フレーム・キーパーだ。

「火の弾を周りに撃ち台か。」

「ちよつとなに無駄な」としてゐるが、

「そうなんだな」俺は一ヤリと笑いながらそう言つて、地

「よく考えてみろよ。」こう言つ遊園地は法律で全ての設備に水をかけられるようにたくさんスプリンクラーや放水機がつけられているんだぜ。そして、やつらがさつき爆発つて言つたけど、爆弾を観覧車の中心とかにとりつけてる可能性が高いだろ。なら、この放水で爆弾に水がかかれば爆発することはないだろ。さてと・・・あとは炎が爆弾に着火しないのと、爆弾に水がかかることを祈るしかない

な
・
・
」

「もし、ダメだったら……」

「そうさ、俺達は木つ端微塵に吹き飛ぶだろ。」

「そんな！」

「安心しとけ、もし吹っ飛んだとしても死ぬくらいだから」「それが嫌なんだつづの！！！！」俺はヘッドロックをかけられた。

「痛い痛い痛い痛いすいませんでした」

そうしている内に5分がたつた。

ボス・・・とう音しか俺達には聞こえなかつた。そう！作戦は成功したのだ！！

「じゃあ後は私に任せて！」そう姫が言つた、姫は観覧車に電気を流し始めた。

「これで多分動くはず・・・・」といつ声と共に、ゴゴゴゴゴゴゴと観覧車が動き始めた。・・・・最初からこうじとけばよかつたのに。

「さてと・・・あとは奴らに制裁をしなくては

「そうね・・・せつかくのデートを邪魔してくれたものね」

「いや・・・それはありがたかったけどね」

「お前から制裁してやろうか！！」姫は俺に四の字固めをしてきた。「痛い痛い痛い痛い許してください楽しめにしてましたからはなしてくださいああい！」

「よし！じゃあ行きましょう」姫は苦痛で歩けない俺を引きずつて本部へと向かつた。

「いいね」姫は言つた。

「さてと、奴らはいるかな」俺は本部へと入つた。

しかし誰もそこにはいなかつた。

「ツチ・・・遅かつたか・・・ん？なんか落ちてある」俺はそれを拾い上げて姫に見せた。

「生徒・・・手帳？・・・」れつて・・・緑ヶ丘中のじやん！

「つてことは・・・こいつらが犯人の可能性が高いんだな」俺は手

を握り締めて言った。
「富士谷 葵か・・・絶対に見つけ出してやるーー。」俺は壁を叩いて言った。

次の日・・・

俺達は学校にいた。授業が終わって帰る時に姫が、

「ねえ。昨日の富士谷 葵って言う人探してみない?」と言った。

「そうだな。そいつに会つてけりをつけたいしな」俺はそう言つて後ろから剛がやってきて、

「昨日の遊園地の事件か・・・。実は俺も観覧車に乗つてたんだ。その犯人にちよつと会つてみたいな」と言った。そると今度は中島さんが教室に入つてきて、

「・・・剛が行くなら私の行く」と言つた。・・・なんて耳がいいのだろうか。

そんなことはさておき、俺達は今日の放課後、富士谷と言つ人物を探しに行くことにした。

そして俺達は集まり、緑ヶ丘中に行つてみた。

「みんな、生徒手帳によると、富士谷は男で、能力は風使いのようだ。

そして写真がはいつていたんだが、それをコピーしてきた。これで情報収集をしてくれ。」

と言ひながらみんなにコピーした写真を渡した。

「なかなかのイケメンだわね!」姫は言つた。

「さてと・・・情報があつたらメールで送つて。もし何も無かつたら1時間後にここに集合しよう。

じゃあみんな分かれて情報収集開始!」と俺が言つた後、みんなは散らばつていつた。

「じゃあまずは学校内を回つてみようかな」

俺は緑ヶ丘中の生徒全員に声をかけてみた。

しかし、全員「知ってるけど教えられない」とか、「帰れ」とか言うだけで何も教えてくれない。

なぜだらうか・・・俺はそう思いながら、教師に聞いてみると、「すいませんが、次に当たる中学校の生徒に情報提供することはできません。」と言われた。

なるほど、次の対戦中学校は「こか・・・これは潰しがいがあるな、
と黙つて、さがう庵は中学校を後にしていった。

「しかし、なにも情報がないな・・・」と俺は思いながら歩いてい

アラビア語の書籍を購入する際は、必ずアラビア語の書籍専門店やアラビア語の書籍を扱う書店で購入することをおすすめします。

「はい？」

「もしもし！ ハアハア・・・・早くきて！ ブロロロロロロロロ・・ハ

言い電話が切れた。

「姫！！」俺は電話をかけ直したが通じない。

水
・
・
・
水
・
・
・
水
つ
て
行
つ
水

旦落ち着いて考えてみた。

船
？
・
・
・
・
・

そうか！船つてことは・・・近くに港があるはずだ！！

（三）・・・・・港の辺の海た

「そ、だ！ 俺は足利区へと走り出した。

「待つてくれ……姫！」

「少し戻つた頃姫は……」「いやあ一どりにいるのかしら」私は手当たり次第写真を見せて回つていた。

その時、4人くらいのグループが、

「俺達そいつのこと知つてるぜ」と語つてきた。

「本当! ? 会わせてもらえないかしら」

「ああ、いいぜ。ついてこい」

私はそいつらについて行つた。

この後、大変なことになることも知らずに……

「ねえ・・・まだなの?」私は港まで連れてこられた。

「ああ、もつそろそろだ・・・」そいつらは一矢一矢しながら語つた。

本当に大丈夫なのかしら・・・一応私は紅蓮に連絡できるようにケータイをポケットに入れておいた。

「ここだ。」私が連れてこられたのは、港の近くの倉庫だ。

「富士谷さん! 例のやつらの一人連れてきました!」

「ああ、さうか・・・」と呟き声と共に、誰かが倉庫の奥からでてきた。

「誰?」

「俺が富士谷だぜ(キリッ)」富士谷は決めポーズをしながら言った。

「・・・・ふーん」

「なんだよその反応! ! めっちゃヤバいじゃないか! !

・・・・そんなことより俺の事を探してたよつだな。」富士谷は一ヤリと笑いながら言った。

「あんたなんでしょう？観覧車吹っ飛ばそうとしたの」「ただけど・・・・何？」

「 そ う だ け ど 」

「ふざけでんじやないわよーー！悪いがどうでもいいわ

私は右手から電気をバチバチさせた。

人くらいの奴らがでてきた。

「」つらはない・・・体力もてあましてんだよ。少しふらい遊んでからおつかー。」

一ノ井は、アーティストとしての才能を認められ、多くのアーティストたちから尊敬される存在となっていました。

紅蓮に電話をした。

しかし途中で奴らの攻撃を食らつた。

「よ、かなしいね……せんしかなしのね！雷双刃！！」
一つの雷の刃が形成されていき、私が振り回すと敵はどんどん吹き飛ばされていく。

そして大体30人近くは倒した。

しかし、後ろからどんどん攻撃がくる。

「さあ……」れいがあかないぢやない……私は言つた時、

一つの炎の弾が倉庫の壁を突き抜けてきた。

「紅蓮！ 遅いわ！ 早くこつらひつちゅうだい！ 『私はわづか』とい氣絶してしまつた。

ひらを合わせた。

「まう、二れは興味深いね。富士翁は言つてゐるしかないよな。俺の新技を！」

これは興味深い「富士谷」だった

「お前が富士谷か・・・後悔するんだな！俺ら光中と戦争すること
を！紅蓮刃！」紅蓮はそう言って合わせた手のひらをどんどん伸
ヘルフレーム・エッジ

ばしてこべ。

すると、手のひらの間にマグマのようなドロドロの液体がでてきて、急速に固ましながら、

とても長い長い一本の太刀が出来上がつていいく。

「おうあああああ……」紅蓮は刀を振り回すと、周囲にいた富士谷以外の奴らが全員なぎ倒されていった。

「これはすうじにね……」富士谷は拍手をしながら言った。

「次はお前だ！」

「まあ戦うのは戦争ことじとくよ……君もその間に体の傷治しておいてね！クイック・エア迅速の風！」

すると、富士谷は俺の背後に移動していく、俺の体にはたくさんの傷ができていた。

俺は悲鳴をあげる「ともどもできず」と倒れてしまった。

一体、アイシのやつその技はなんだつたのだらうか……

俺達は富士谷との戦いを終えた後、自主練を繰り返し、戦争へとそなえた。

そして、因縁の緑ヶ丘中との戦いの当番となつた。

「みんな、今回の奴らは強いからな！ なんてつたつて人数がウチの学校の倍以上いるからな。

氣をつけてかかれ！！ 今回は危ないのでAクラス・Bクラスの半分を防御に回し、それ以外のクラスは全員で攻撃にすることにした！ 「ア・クロス」 ! 今回は核の破壊が最優先だ！

今回もよろしくたのむぞ！！！ それでは、出陣！！！ という鬼瓦先生の声と共に俺達は緑ヶ丘中へと向かつた。

しかし、もうすでにあちらの軍が校門前をふさいでいた。

「おい、これじゃあ校庭からでられないぞ！」

「俺に任せんんだ！」 剛はそう言い、地面に手を当てた。

「大津波！」 「ウォーター・ヒックウェーブ」 地面から大きな水の壁ができあがり、

その壁が津波のように戸門前の奴らに襲い掛かる。生徒は流されていつた。しかしこまだ後ろにいる。

「次は俺だ！ 紅蓮刃！」 「ヘルフレイム・エッジ」 手のひらを合わせ、ゆっくりと伸ばしていく。

手の平から長い刀が形成され、振り回すと奴らが吹っ飛んだ。

「お前、もの凄い技つくったんだな。」

「お前もだろ、剛」 俺達はハイタッチをした。

「さてと、ここから向かいますか」 俺が言うと、

「この先に3つの道がある。

1つ目は敵軍がうじやうじやいる。2つ目は罠がたくさん仕掛けられている。

3つ目は・・・とくになにもなじようだが遠回りだ。どうする？

と下田は言った。

「一つ田の道にしよう。敵もぶつぶせば一石二鳥だな。」俺がそう言ったと、

「やめて…」と姫が言った。
「どうやらみんなも姫と同意見のようだ。」

「…わかった。」今は安全に行こう。そして、俺らは安全な道を通りにした。

「もうそろそろですね。」黒澤は言った、「待て…さっきの一つ田のルートのやつらがいってくくる…」下田は言った。

「どうやら私の出番のようですね」旭山はそう叫んでみんなに田をつぶるよつに言つて、

「光錯覚！」^{シャイン・イマジン}と胸の辺りで手をの形にして言つた。

すると、そこから一筋の光がでて、敵の軍団のところへ一瞬にして閃光した。

敵は、俺達と違つぱうへ走つていった。

「もう目を開けていいですよ。今ので敵は私たちがあつてると思ひ込んでいますので。」

と自信満々な顔をして言つた。

「じゃあ侵入しましようか」俺達は校門へと入つた。
そこには大量の生徒達が待ち構えていた。

「本当に人数だけはすごいのね」姫は言った。すると、その軍の中から一人がでてきた。

「よつこそ縁ヶ丘中へ。僕の名前は工藤。」

「俺の名前は鯖島だ！！俺らはこの学園の最強7人と呼ばれているメンバーの内の一人だ！」

悪いがここでお前らを倒させてもらひぜーまずは手始めにこいつら

と遊んでもらおうか！」

そつ言つと、周りの奴らが飛び掛つてきた。

「もう・・・めんどくさいですね。幻想ノ世界！」^{イマジン・ワールド}黒澤の田が光り

だし、

襲い掛かつてきた奴らの体を引き裂く。全員が痛みに悲鳴を上げ、地面へと倒れこんだ。

「ほつ、これは面白いですね。富士谷さんの言つとおりの骨のある奴らだ」工藤はニヤリと笑つていつた。

「んで、誰が残るんだあ？？」

「ここは私に任せて！」旭山さんが言つた。

「ウチもいけるで！」続いて高森さんが言つた。

「高森さんは攻撃技使えないんじゃないの？」姫が聞くと、

「ウチだって攻撃技くらい習得したわ！」と言つた。

「よし、わかつた！じゃあ俺らは先にいこう！」そう言つて、俺、剛、

姫、黒澤、下田の五人は校内へと入つていつた。

「・・・おこおこ、本当にいひつりでいいのか？？」鯖島は笑いながら言つた。

「私達をなめないで！」

「そいつは面白そうだな！」と言い、鯖島は瞬間移動した。ブシリ・・・と言つ音と共に高森の腹に鯖島の腕が刺される。

「うぐう！」

「なんだ・・・もうノックアウトかあ？？」

「もうノックアウトかあ？？」鯖島はそう言しながら高森の腹に刺した手を抜く。

「甘いで！^{スーパーパーフェーリング}超回復！」高森がそう言つて腹に手を当てる、腹の傷がふさがつた。

「ほう・・・でもそれじゃあ攻撃はできないよなあ？」また鯖島が瞬間移動して、高森の背後にいた。

そして、高森の周りを高速で一周した。すると地面に丸い印ができるあがつた。

「こいつはどうだ？^{ポイント・ワープ}座標移動！」

すると、地面が消えた。そして、その上の高森が落ちていく。

「さてと、俺らはこいつで戦わせてもらひや」鯖島もその六へと落ちていった。

「高森さん・・・頑張つて！」旭山さんはそう言つて、胸の辺りで手をの形にした。

「痛つ・・・！」高森は暗闇の中でそう言つた。

「こひばぢいやねん・・・！」そう言つたと同時に上からなにかが降ってきた。

「一体・・・なに？」高森がそう言つた瞬間に、また腹に手が刺さつていた。

「どうだい？ 痛いだろ？」鯖島は手をぐりぐり動かしてくる。

「ぎやあああああ！」高森は悲鳴をあげた。

「いいねえ・・・いいねえ・・・最高だねえ！・・・！」鯖島はもう片方の手も腹に刺した。

「うぐう・・・」高森は手もだせない。

「・・・・・・」高森は手もだせないんやな・・・・・」高森は鯖島の

右手を触つた。

「コントローラー・ヒーリング」

「逆回復！」そつぱつと、回復するのではなく、鯖島の手がどんどん

消滅していった。

「つぎやあー！てめえ・・・なにしやがつたー！」鯖島は消えた自分の腕を見ながらそつぱつと、

「簡単な話や！回復というのは本来、体の傷を治すことや！

ならそれの「反対のことをすればいいんや！」もともと傷もない腕に逆回復をすることによって、

細胞がどんどん破壊されていき最後には・・・」高森は自分の腹の傷を治しながら言った。

「なるほど・・・クフフフフフフ

「なにが面白いねん！」

「なにがって？・・・」こんなにゾクゾクしたことは久しぶりなんだよお！――」鯖島は叫んだ。

そして、また背後に回ってきた。

「同じ手は何度も通用しないわ！」高森がもう片方の腕を掴もうとしたら、もういなくなっていた。

「おいおい・・・上だぞ！――」気づいたときには鯖島は上にいた。そして天井を触つた。

「ポイント・ワープ」天井（もう十の塊と言つたほうがこゝもの）となつて高森の頭へ落ちてくる。

「やばいで・・・分解回復！」デリート・ヒーリング高森は落ちてきた天井に触つた。

すると、天井はどんどん消滅していく、高森の横に土に変換されて落ちてきた。

「やつぱり、楽しいぜ！――」鯖島はもう一度飛び掛つてきた。

「もうおしまいや！――逆回復！」コントローラー・ヒーリング高森の手は鯖島の足へと当たった。

そして、どんどん分解されていく。「俺の・・・負けだな」鯖島はそのまま地面へと倒れこんだ。

「旭山・・・ウチ・・・勝つたで！」高森は涙を流して言つた。

「さてと・・・こいつの傷なおさなかんな・・・完全回復！」グレイトフル・ヒーリング

すると、鯖島の傷がどんどん治つていぐ。

「どうして……俺なんかを助けてるんだよ……」

「傷ついたやつを助けるためにウチの能力はあるんやで！」

すると、天井が崩れ始めた。さっきの天井破壊の影響であろう。

「ツフ・・・このままだと俺達どつちも死んでしまつな……」

「くそつ……逆回復するしかなさそつね……」

「その必要はないな……」鯖島は高森の肩を触つていつた。

「傷を治してもらつたお礼だ……ごめんな……せつかく治してもらつた体を無駄にして……ポイント・ワープ座標移動！」すると、高森は地上へと飛ばされた。

「……俺つて馬鹿だよな……」

ドシャアアアアアアアアア……と言ひと音と共に鯖島は土に埋もれた。

「鯖島……鯖島……」高森は地上で鯖島を探していた。

「あいつ……なにしてんねん……鯖島……」高森は泣きながら探した。

そして、さつきまで戦つてた場所に戻ると、穴が土で埋もれていた。

「あいつ……」高森は泣きながら土を掘り始めた。しかし、その

穴の中のどこにも鯖島はいなかつた……

すると、後ろから肩を叩かれ、振り向くと

「死んでるとでも思つたか？」と鯖島は笑いながら言つた。

「今回は俺の負けだ。お前は核を破壊しにいけ！核は体育館にあるぞ！」

「でもそしたら、あなたの中学校が負けちやうじやない！」

「いいんだ……それよりこの能力決闘会にはもっと恐ろしい事実が隠されている。

俺達の7人はその事実を知つてしまつた。だからこんな戦いどつで

もいいんだ！！」

「その事実ってなんなの？」高森は訪ねた。

「それはだな・・・」すると、鯖島のケータイにメールが届いた。

鯖島は読み上げると、「やばい！こんな戦争中止だ！！事態が変わった！」と言い学校の中へと走り出した。

「一体なんなのよ！」高森も鯖島を追いかけて学校の中へと入つていった。

NO.23「対能力者用兵器（AKUMA）」

「じゃあ最初から話すぞ……」鯖島は走りながら瞳を「クリ」と飲み込んだ後言つた。

「あれは俺達が一回戦をしていた時のことだ。

俺達は戦闘することもなくのんびり核の護衛をしていたんだがな、俺達のグループの中に悪趣味なやつがいてよ。そいつは『忍者』って呼ばれている程隠密なんだよ。

そしてそいつがほんの好奇心で校長室に隠しカメラをしけたんだ。そこで、校長が手にしていた資料があつてな。それを見ながら誰かと電話してたんだよ。

その電話の内容が、『殺人兵器』とか『能力者大量殺害』などという内容だつたんだよ。

そして、俺達のグループのリーダーの富士谷さんが校長を呼び出している間に『忍者』がその資料をもつてきただ。

そこに書いていた内容がだな……『対能力者用兵器（AKUMA）について』と書いていたんだ。

そのAKUMAっていうやつはなあ、能力の効果を打ち消すことができるし、

AKUMA自身も能力を使うことができんだ。しかも、AKUMAはもうすでに大量生産されていて、今回の能力決闘会で勝ち抜いた学校とAKUMAで戦闘テストを行うんだ。

しかも最悪なことにAKUMAは感情を持たないから、そいつを殺すまで戦い続けるんだよ。

だから俺達はとつととこんな大会やめにしようということで、奴らのグループの経済力を奪つてたんだ。お前も知つてるだろ？あの、遊園地の事件……あれ、俺らでやつたんだぜ

「聞いたことはあるで！」

「じゃあ話を続けるぞ。それでな、俺達の作戦に気づいたやつらはもつAKUMAをこっちへ派遣しようとしているんだ。あと3週間くらいでこの緑ヶ丘中に上陸するらしい……だからこんな戦争をやめちまつて勢力を温存したいんだよ……」

「なるほどな……ほな、ウチらも協力するで！」

「ありがとよ……今は早く富士谷さんに伝えないとい……」そう鯖島は言い、走るスピードをあげた。

「その頃旭山は……」

シャイニング・キャノン

「いきます！閃光砲！」旭山の手から光の弾が放たれる。

「ぐう……なかなかやりますね！」工藤は弾を手で受け止めた。そして、弾は工藤の手の平の上で消滅した。

「次は僕の番ですよ……」そつまつと工藤は大きくジャンプした。

ダークネス・クロスフレイド

「暗黒十字斬！」工藤は空中で叫ぶと、手を十字に動かした。

すると、旭山の背中に十字の傷がついた。

「うぐう！」旭山はよろめいた。

「どうして……？……触つてもいなかつたし、能力が見えなかつたのに……」

「僕の能力は闇の能力です。僕と貴方はどうやら相性最悪のようですね……」

工藤は地面にスタッと足をつけた。

「確かに、光は闇に弱いわ……しかし、闇も光に弱いのよ……」
シャイニング・クロスフレイド
閃光十字斬！」旭山は工藤の技を再現してみた。

「これはすごいですね……しかし」工藤はニヤリと笑いながら手で十字斬を受け止めた。

「それはどうかしら？」旭山が放つた衝撃は、工藤の手に深い傷をつけた。

「ああ……きれちゃいましたね」工藤は手からでた血を舐めつけた。

た。

15

「この人……様子がおかしい！」それに先程までの工藤ではなかつた。

「……オイシイ……お前……殺ス！！」工藤の体が真っ黒に染まり、背中からメキメキという音と共に翼が生えてきた。

殺人！！！！

「殺ス！！！」悪魔のよつた姿の工藤は口を大きく開けた。

「ダーカネス・エッグプラント
闇卵植！！」悪魔の口から黒い霧がでる。

その霧はどんどん集まっていき、黒い塊となつた。

「死ネ！」という声と共にその塊が旭山へと寄生した。

「ちよつと・・・・なにこれ！！」旭山は必死にその塊を放そうとしたが、全く離れない。

「ソイツハアクマノタマゴダ！！オマエノ体力をドンドン奪ツテイクゾ！！」悪魔は笑いながら言つた。

「くつ・・・・・！」旭山はだんたんと衰弱していった。その時、

学校2階から高森と鯖島が、

「そいつは人間じゃない！！AKUMAだ！！もう寄生されちまつてたのか・・・

まあいい！！こいつの背中に悪魔の刻印といつ、心臓のよつたものがあるからそいつを潰せ！！」と言つた後、再びどこかへ走つてしまつた。

「詳しいことはわからないけど、とりあえずやるしかないわね・・・

・旭山はAKUMAの方へと走りだした。

「邪魔ダ！」AKUMAは肥大化した腕で殴りかかつてきただ、華麗に避けた。

「まずは目を封じる！光錯覚！」光がAKUMAを包み込んだ。

「グワアアアアア！」AKUMAは暴れだした。その隙に背後へと回る。すると、背中に腐敗した肉のようなグロテスクな物が埋め込まれていることを確認した。

「あれが悪魔の刻印ね・・・喰らいなさい！！閃光十字斬！！」

光の十字の衝撃は刻印へとまつすぐに突き進んでいった。そして刻印に直撃すると、

「グオオオオオオオオオオ！！」という唸り声を上げてAKUMAは口

から血を吐き出した。

「ヨクモヤツタナ・・・・・！」 終焉ノ闇（エターナル・ダークネス！）

AKUMAは一息を向くと、右手を旭山へ向けてきた。

するどん手が黒くなつていき、鋭い鎌のようになつた。

「キエロ！」 AKUMAは一瞬で旭山の背後にいた。ブショウウ！ という音と共に旭山の体は切り裂かれていて、旭山は地面に倒れこんだ。

「タノシカツタ」 AKUMAはそのまま学校内へと入つていった。

「その頃紅蓮達は・・・」

「旭山さんへの無線がつながらない！ 俺は無線機で何度も旭山さんを呼んだ。

「こうなつたら救助が必要ね・・・」

「なら俺がいく！ 俺はこの先戦えないからな」 下田は言った。

「僕もいきます。下田君だけでは危険すぎます」 黒澤は言った。

「・・・じゃあ任せた！ なにかあつたら無線で知らせてくれ！」 俺は言った。

「わかりました。いきましょう、下田君」 そう言い、二人は逆方向へと走り出してつた。

「さてと・・・残りは俺らだけだな・・・」 剛は言った。

「まあどうにかなるわよね・・・」 と姫が言った瞬間、手裏剣が飛んできた。

「危ないわね・・・」 姫の手には手裏剣がくつついていた。電磁石の力を利用したものだろう。

「ここまでくるだけあつて、さすがだな。」 忍者は姿を現した。

「本当にこいつら強いんですか？」 続いて小学生5年生くらいのぬいぐるみを持つた女の子がでてきた。

「紅蓮こいつらはあたし達に任せて！ あんたは富士谷に仕返しをし

にいって…」

「でも…」

「お前がリーダーなんだ！お前が行かなくて誰がいく！」剛は怒鳴った。

「わかったー早く追いつけよー」そう言つて俺は上へと走り出した。
「そうはさせないでじざるー」忍者は俺に向かつて手裏剣を投げた。

「お前の相手は私だつづつの…」姫はまた手裏剣の軌道を電気で

ずらした。

「ほう、面白い…」忍者は一瞬で姫の懷へと入つてきた。

「陰陽拳撃！」忍者の放つた一撃の拳が姫の腹にあたり、姫を天井まで吹つ飛ばす。

「きやあ！！！」姫は天井にぶつかつたあと、そのまま地面へと叩きつけられた。

「忍術の恐ろしさを教えてやるつ」忍者は一ヤリと笑つた。

「忍術の恐ろしさを見せてやるつ」 そう忍者は言つと、姫の周りをゆっくりを回り始めた。

「本来、忍術というのは能力のよつたな怪奇現象ではなく、自分の肉体を最大限に活用して攻撃する体術だ。しかし、我々の里で編み出された忍術は、能力と忍術をうまく融合して、強烈な一撃や多彩な忍法を使えるようにした『究極忍術』というものだ。例えばこんなことができる。」 そう言つと、さつきまで姫の周りを回っていた忍者の姿がだんだんと薄れていき、最後には消えてしまった。

「一体どこにいったの！？」

「ここだ」 忍者は姫の後ろにいた。そして、蹴りを入れてこよつとした。

「甘いのよー・雷ノ波動！」
サンダー・ウェーブモーション

姫を中心として姫の体から円状の電気をまとつた衝撃波は放射された。

「ぐふ！」 忍者の腹に衝撃波は直撃した。しかし、衝撃波は広範囲な攻撃なので、周りにいた女の子や剛にも直撃した。

「ぐはあああああーー！」 剛は電気に弱いので、相当なダメージを受けてしまった。

「痛い・・・ですわね」 女の子にはあまり効いていないようだ。

「ごめん！・・・お願ひだからどこかへ移動してーー！」

「わかった。俺はこの女の子と違う場所へ行く。嬢ちゃん、俺とについてこい」

「あらあら、鬼ごっこですか？ 鬼ごっこは好きですわよ」

「全く、やつぱり子供だな」 そう言つて、剛と女の子は走り去つていつた。

「・・・さてと、私もコレを外して本気を出しましょーか」 姫はそういう、手足につけていた金色のリングを外していった。

「これは能力制御装置つて言つてね、能力の威力を抑えることがで
きるの」

「なぬ！？今までおぬし、それをつけて私と戦つて
いたのか！？」

「そうよ。じゃあ一発いくわよ！！超電磁砲！！」

姫の手からでた一筋の雷の光線は、忍者へと直撃した。

「ぐはああああ！！」忍者は姫の攻撃に耐え切れず、倒れた。

「これは驚いた。私を転ばせたのは富士谷さん以外には誰もいなか
つたのに・・・」

これは私も本気でいかないといけないようだな」忍者はそう言つて
立ち上がると、今までとは比べ物にならない速さになつた。

「全く見えない！・・・」姫は必死に忍者の残像を追いかけたが、
追いつけなかつた。

姫が気付いた時には、体にたくさん切り傷ができていた。

「つたく・・・まどろつこしいわね・・・本当は使いたくなかつ
たけど・・・」

姫はあの時買った能力の威力を上げるガムを食べた。

「さてと・・・全力でいかせてもらわよ！」姫は目をつぶりなが
ら正面に両手を構えた。

「集中よ・・・集中しなきや・・・」姫は目をつぶりながら集中
力を高め、音で忍者の位置を見つけ出した。そして正面に忍者が來
た瞬間、

「吹つ飛びなさい！！超電磁砲！！」^{ハーフトロッコ・ホールガン}姫の両手から放たれた巨大な
雷の光線は忍者へと直撃した。

「ぐつ！！！！無念！！！」光線は忍者へ当たつたまま、壁に直撃
し、壁が崩れ、忍者は外へと落ちていつた。

「終わつたわ・・・ガムの副作用が出る前に、紅蓮の援助へ行か
ないと・・・」

姫は紅蓮が向かつたほうへと走り出した。

「その頃剛は……」

「ここらへんでいいかな？」

「やつとですね」女の子はぬいぐるみを地面に置いた。

「私の名前は雨森 花子ですの。」と言つ頃と共に、花子は剛の後ろへと回っていた。

「そこか！」剛は殴りかかった。

「そこじゃないですわよ！」花子は空中にいた。

「空中なら避けられないだろ！」剛は殴りかかった時に使った手を地面へとつけ、逆立ちのようにして花子に蹴りをいれようとした。

「遅いですわね。じゃあ次は私が鬼の番ですわね」花子は横にいた。

花子は一瞬の間に剛の腹を5～6回殴った。

「ぐう！－こいつ・・・速い！－」

「私の能力は・・・そうですわね・・・光速地帯ハイスピード・ゾーンといったところでしょうから」

花子は笑いながら言った。

NO -25 「究極忍術」（後書き）

感想・評価等お待ちしていますーー
お気に入り小説登録もお願いします！

「なんて速いんだ！？」

「私の能力は光速地帯ハイスピード・ゾーンと言われるほど速いのですよ。

そろそろスピードアップの時間です。加速アクセセル・ファースト？！」

すると、花子の速度がまた上がった。そして、どんどん攻撃を入れられていく。

「ぐふ……一発でも『えられれば勝てるといつのこ……』

剛は無差別に水の弾を撃ち始めた。

「そんなの当たりませんわ！！」花子の攻撃は止まらない。

「当たらなくともやるしかないだろ！！」

「全く……バカですわね！ 加速アクセセル・セガンド？！！」

花子の速度はまた上がった。

「ぐはあああああー！」とうとう剛の体に切り傷ができ始めた。

「あらあら、血がでてますわよ！」花子の猛攻は止まらない。

しかし、剛は水の弾を色々な箇所に撃ち続けた。

「だから……あたらないつていつてるでしょ！！」

「もしかしたら当たるかもしれないだろ！！」

「そんなことありえないのですよ！！ 加速アクセセル・サード？！！」

ブシコウウウウウウウ！！！

剛の体にはとうとう、切り傷ではなく、刃物が刺さったような深い傷がたくさんできてきた。

しかし、剛の乱射は止まらない。

すると、奇跡的に一発が花子に当たった。

「どうだ？ 痛いだろ」

「もう許しませんわ！！ 加速？（アクセセル・フォース）！！」

花子はさらに加速した。どんどん剛の体に深い傷ができるいく。剛の体の皮がどんどんはがれていき、そこから血が染み出るよつてでしていく。

「ぐつ……」剛の顔は強烈な痛みにより、歪んでいた。

「もう可哀想ですし、とどめといきましょうかしら……さよう

なら……加速？（アクセル・ファイナル）……」花子は一瞬地面に立ち止まってから、右手を刃物のように鋭くして、勢によく地面を蹴り出した。

「甘いんだよな……それが……」剛はニヤリと笑つて言った。花子は地面に倒れこんだ。

「どうして！？」

「今まで俺が水の弾を乱射していたのは、お前を狙っているわけではなかつたんだよ。

お前が地面を蹴る瞬間に床を水浸しにしておくことで、摩擦力を失わせ、加速することはもちろん、

転んで走ることができなくなるのさ……」これでとどめだ……水暴龍！
ウォーター・クレイジードラゴン

！

「いやあああ……」暴れる龍は花子に突進して、唸り声を上げて壁へと突進した。

壁と龍の間に挟まつた花子は氣絶していた。

「終わつたな……紅蓮……頑張つてくれ……俺は少し休憩していく……」

そう言つて剛は地面に倒れこんだ。

「その頃紅蓮は……

「ででこい……富士谷……」俺は屋上へと上つてきた。

「もう来たのかい……随分と早いね……」

「俺と勝負だ……」俺は富士谷に右手を向けて言つた。

「わかつたよ。今度は本気でいかせてもらうけどね。」富士谷は二

ヤリと笑つて言つた。

しかし、富士谷の瞳は確かに殺氣に満ち溢れてた。

本当の戦争が、今始まる・・・

「！」の前とはもう違つうんだ！炎碎鉗デスマ・フレイム・ハンマー！！

俺の手に、炎をまとつた大きなハンマーが形成されていった。

「つぶれろ！」俺はハンマーを富士谷の頭に叩き付けた。

「全くもう・・・あぶないじゃないか。逆撫さかなでのかぜノ風ノ！」

富士谷は頭に振つてくるハンマーをやさしく撫でるように触ると、強烈な風が吹き、ハンマーの向きが変わり、攻撃がはね返されてしまった。

「全く君は進化しないようだね・・・次はこつちの番だよ。混沌こんとノ舞風ノ！」そう富士谷は言い、俺の体を刀で斬るように手を斜めに動かした。

ブシュウウウ・・・といつ音と共に、俺の体が富士谷の手の動きと連動して、斬れた。

「ぐつ！..」俺は強烈な痛みに耐え、手の甲を合わせた。

「もうその技は通用しないってば」

「それはどうかな？」紅蓮はニヤリと笑つていつた。そして、合わせていた手の甲をゆっくり伸ばし始めた。

するとその手の甲から一本ずつ、炎が固まつてできた、赤い色の鎌のようないかで滑らかなカーブを描いた刃が形成された。

「一本でも一本でも変わらないぞ！」富士谷は俺のほうへと走ってきた。

「それがちがうんだよな！制裁ジャッジメントノ炎鎌ヘルクロウ！」

俺は走つてくる富士谷の横を通り過ぎた。

「ぐはあ！..」富士谷の腹には一つの切り傷ができていた。

「・・・どうやら君は僕を怒らせたようだね」富士谷の顔が殺氣に満ち溢れた瞬間だつた。

「ここで消えろ！迅速クイック・エー・ア・

「富士谷はまた一瞬で俺の背後へと移動していた。

そして、俺の体には無数の切り傷がついていた。

「ぐう！」俺はよろけた。しかし、ここで負けたらみんなに顔を合わせることができない。

「俺は・・・・・俺は・・・・・負けられないんだよ！……」そう俺が叫んだ瞬間、

体中の色が真っ赤に変わり、背中には大きな龍のマークができた。

「うぐう！」それと同時に全身に強烈な痛みがはしる。

「あれは！？・・・・・魂の開放だというのか！？」富士谷は言った。

「なんだそれは・・・・・」俺は聞いた。

「体に神の力を宿しているもののみが使える能力のようなものだ。しかし、強靭な力とともに生命力をどんどん神に吸収され続けるので、その状態を保ち続けると死ぬと言われている・・・」

「じゃあ今の俺は強くなってるんだからお前のことひとつと倒せばいいんだな！」

俺は富士谷の方へ走りだした。スピードも格段と上がっている。

「ジャッジメント・ヘルクロード」俺は手の甲からはえた一本の鎌で富士谷を斬りつけた。

「ぎやあああ！」富士谷は強烈な痛みに顔を歪めた。

「どうやら・・・僕も使うしかないようだね・・・魂の開放！」そ

う言つと、富士谷の体からもの凄い風が吹き出し、俺は吹き飛ばされた。そして、富士谷の方を見ると、

富士谷の背中には風でできた翼と、大きな鯱のマークが^{イタチ}できていた。

「君だけが開放を使えると思ったら大間違いだよ！上昇気流！」

そう言つと、富士谷は背中の翼を使い、空へと舞つた。

「俺だつて！龍炎噴射！」俺の足から今までとは全く色の違う、綺麗な赤色の炎が噴射され、俺も空に舞つた。

「・・・さてと・・・はじめようか！」

「どっちが強いか・・・白黒つけようじやねえか！」

NO.27 「決戦」（後書き）

感想・評価お待ちしております！

俺は一つの鎌を富士谷へと向けて接近した。そして、大きく鎌を振る。

「そんなもの効かないよ！」富士谷の体から突風が吹いて、俺は吹き飛ばされた。

「ぐつ！もう一発！」俺は足からでている炎の出力を上げてもう一度富士谷へと向かった。

「何度も無駄だ…」

「確かにこのリーチでは無理だよな」俺はニヤリと笑つて言った。そして、右手へ意識を集中させた。するとメキメキという音を立て右手の鎌の刃先から新たな炎が生まれ、先程の2倍近くまで刃物のリーチが伸びた。

「これならいけるだろ！」俺はその刃を富士谷の肩へと振りかざした。

「逆鱗ノ嵐！」^{げきりんのなき}富士谷は鎌が当たる瞬間に、ものすゞい風を吹き出し、刃が当たるのをギリギリで防いだ。

「ぐつ！…まだまだあああ！」俺は右手だけでなく、両手で鎌に力をいれ、富士谷の肩に傷をつけようとする。

「こつちだつてえええ！」富士谷もその鎌を受け止めるべく、風の出力を上げた。

「負けられないんだよおおおおーー！」俺は歯を食いしばって力を入れた。

グサリ・・・という音と共に富士谷と肩に、浅いが鎌が刺さった。

「痛つ！…こつちだつてえええーー！」富士谷は鎌が肩に刺さつたまま、右手を俺のほうへと向けてきた。

「風鈴の殺鎌！」^{エアーバズト・デスサイズ}富士谷の手から一瞬で俺の体へと強烈な風が飛んできて、体に大きな鎌で斬られたように傷ができた。

「ぐつ！…俺もその仕返しとして鎌を富士谷の肩へと深く刺す。

「さやあ……」富士谷は一瞬ひるんだ。

「今だ！」俺はその一瞬を見逃さず、足の炎の噴射を上げ、勢いよく富士谷に接近すると同時に、

富士谷にアッパーをきめた。すると、富士谷は地面に対し背を向けていた。

「狙い通りだ！」俺は鎌を普通の炎に戻し、戻した炎を右手にまとわせ富士谷の腹へと当てた。

「俺の炎は少々響くぜ……炎旋削！」^{フレイム・ドリル}俺は富士谷の腹を全力で殴つた。

「がはあ……」そのまま富士谷は地面へと落ちていく。

そして、地面にぶつかり大きな砂ぼこりを上げた。

「……やつたのか？」俺は砂ぼこりが消えるのを待つた。

砂ぼこりが消えた。しかし富士谷はどこにもいない。

「後ろだ！」俺が振り向くと富士谷は俺の背後にいた。

「やられたらやりかえす！それが俺のモットーだ！狂風破拳！」^{クレイジー・エア・クラッシュ}

富士谷は右手に風をまとい、俺の顔面を殴つた。

俺は吹き飛んでそのまま学校のガラスへと衝突してガラスを突き破る。

俺は痛みに耐えながら立ち上ると横から高森と鯖島が息をきらして走ってきた。

「紅蓮！……こんな戦争……もうやめて……」

「ダメだ！まだ俺は富士谷を倒していない！」

「そんなことどうでもいい！富士谷さんもいるんだろ！早くこっちへきてください！」

今の現状を説明します！」鯖島はそう言い、外の富士谷を呼んだ。

「一体なんなんだ！今いといこりだつたのに！」富士谷はキレ気味に言つた。

「そんなことより大変です！！！工藤にAKUMAの卵が埋め込まれていたようで、

その工藤が現在、AKUMAの完全態になろうとしています！」

「なんだとー？」

NO-28 「天に舞ひ焰龍（えんじゆう）と風鶴（かぜいたち）」（後書き）

感想・評価お待ちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1885y/>

学校戦争！

2011年11月26日21時57分発行